

行い、平成27年10月に、今までの日帰り全身麻酔で内服させていたオルメテック錠[®]20mgの術前内服を中止し、アムロジン OD 錠「イセイ[®]」5mg、リスペリドン OD 錠[®] 0.5mg、プロピペリン塩酸塩錠[®]20mgだけを内服させ、日帰り全身麻酔を行ったところ、問題なく日帰り全身麻酔を施行することができた。これは、途中中止した日帰り全身麻酔における血圧低下が、オルメテック錠[®]20mgの内服に起因していると考えられる。すなわち、日帰り全身麻酔中に使用された麻酔薬とオルメテック錠[®]20mgの相互作用で、降圧作用が増強された可能性があるため、術前管理における降圧薬内服の可否決定には注意が必要である。

8) プロポフォール投与下の脈波変化による呼吸数測定

○佐藤 光¹, 古山 昭², 大須賀謙二²
山崎 信也¹, 川合 宏仁²
(奥羽大・歯・口腔外科,
奥羽大・歯・口腔機能分子生物²)

【緒言】歯科・口腔外科領域のプロポフォールによる静脈内鎮静法では、開口器を使用することが多く、このような場合、鼻カニューラを用いた呼吸炭酸ガス (ETCO₂) や経皮的動脈血酸素飽和度の変化から呼吸状態を把握しようとしても、開口器による上気道閉塞のため、呼吸状態を評価し難くなる可能性がある。一方、Covidien japanから発売されたレスピラトリーモニタ PM1000N[®]は、指先に装着したセンサーによって脈波解析することにより、呼吸数測定が可能となる機能をもつ。そこで、静脈内鎮静中に本機器を用いて、脈波解析により算出された呼吸数が、目視計測による呼吸数またはETCO₂から算出された呼吸数とどのように相関するのかを検討した。

【方法】対象はボランティア11名で、点滴確保後、本機を装着し、プロポフォールを6 mg/kg/hで持続投与開始した。投与時間後15分の時点で、開口器を挿入しただけの状態での呼吸数を測定した。次に、20分の時点で開口器を用いて最大開口位をとらせ、人為的に舌根沈下を起こした状態で呼吸数を測定した。

【結果】15分の時点では、目視計測による呼

吸数と脈波解析による呼吸数の比較、および目視計測による呼吸数とETCO₂による呼吸数の比較において有意な相関が認められた。20分の時点では、目視計測による呼吸数と脈波による呼吸数の比較では有意な相関は認められなかった。

【考察】歯科・口腔外科領域の静脈内鎮静下に、呼吸状態評価の一つとして呼吸数をモニタリングする場合、ETCO₂による呼吸数の測定には不正確になりやすい。しかしながら、本機を用いた脈波解析による呼吸数は、目視計測による呼吸数と有意に相関することから、脈波解析による呼吸数測定は、歯科・口腔外科領域の静脈内鎮静中の呼吸状態評価に有用であると考えられる。

9) 顎/舌下腺および口唇腺唾液分泌に対するプロポフォール投与の影響

○古山 昭¹, 大須賀謙二¹, 山崎 信也², 川合 宏仁¹
(奥羽大・歯・口腔機能分子生物¹,
奥羽大・歯・口腔外科²)

【背景】唾液分泌は自律神経系によって調節される (Proctor *et al.* 2007, Ekstrom *et al.* 2012)。副交感神経の興奮は唾液腺や周囲の血管に作用し、唾液分泌量増大をもたらす。また、交感神経の興奮は唾液腺や周囲の血管に作用し、唾液タンパク質濃度を増大させる。

一方、プロポフォール静脈内鎮静法は歯科治療時の患者のストレス軽減に有効であること、その原因として、プロポフォールが交感神経活動を(副交感神経活動よりも)強く抑制することが報告されている (Ito *et al.* 1998, Kawaai *et al.* 2000)。しかしながら、プロポフォールが自律神経活動に与える影響については異論もあり、より多角的な検討が求められている。

【目的】プロポフォール静脈内鎮静下において、プロポフォールと唾液分泌量ならびに唾液タンパク質分泌との関係を明らかにすることにより、プロポフォールが自律神経系に与える影響を検証する。

【材料と方法】1. 被験者：本学男性職員で、有志健康成人12名。平均年齢30.8±5.3才、平均体重74.9±7.4Kg、健康状態はASA-PSで1であった。2. プロポフォール投与方法：6 mg/kg/hr